

136

婦人外陰瘙痒症より分離した酵母菌種に就て

松浦、喜作

(日立製作所附屬日立病院婦人科)

婦人外陰瘙痒症 20 例の外陰皮膚あるひは腔内より分離した酵母菌 30 株に就て、子囊及び菌絲形成の有無、炭水化物分解能力の差異を検して *Saccharomyces* に屬するもの 2 株、*Myceloblastan*on に屬するもの 25 株、*Cryptococcus* に屬するもの 3 株を得た。

Saccharomyces に屬する 2 株はグルコーゼ、マンノーゼ、レブローゼ、マルトーゼ、ガラクトーゼ、サッハローゼ、ラフィノーゼを分解して酸と瓦斯を形成し、Hansen 及び Guilliermond の糖類酸酵性による分類に従へば、Genus *Saccharomyces* の Untergruppe (I) に屬する菌種である。*Myceloblastan*on に屬する 25 株の中 12 株はグルコーゼ、マンノーゼ、レブローゼ、マルトーゼ、ガラクトーゼを分解して酸と瓦斯を形成するがサッハローゼでは酸は形成するが瓦斯發生なく所謂 *Myceloblastan*on *Cutaneum* OTA に一致する菌種であり、つぎの 12 株は前者と異なる點はガラクトーゼで瓦斯發生がないだけで、その他の諸性質は殆ど同一で所謂 *Myceloblastan*on *gifuense* TANIGUCHI に一致する菌種にて、残りの 1 株はグルコーゼ、マンノーゼ、レブローゼ、サッハローゼを分解して酸と瓦斯を形成しマルトーゼ、ガラクトーゼ、ラフィノーゼでは酸は形成するが瓦斯發生のない菌種である。*Cryptococcus* に屬する 3 株は、いづれもグルコーゼ、マンノーゼ、レブローゼを分解して酸と瓦斯を發生する菌種である。即ち婦人外陰瘙痒症より分離した菌株は *Myceloblastan*on *cutaneum* OTA 及び *Myceloblastan*on *gifuense* TANIGUCHI の 2 菌種が大部分である。一般に妊娠あるひは糖尿病の時は、さうでない場合に較べて外陰皮膚あるひは腔粘膜の炎衝性變化が強い傾向があるが、さらにこれを菌種別にみると *Myceloblastan*on 特に *Myceloblastan*on *cutaneum* OTA 及び *Myceloblastan*on *gifuense* TANIGUCHI はその他の菌

[醫學と生物學・第 1 卷・第 10 號・頁 473 - 474・昭和 17 年 5 月 20 日]

種よりも著明な炎衝性變化を惹起するが多いし、またこの兩者の廿日鼠に對する毒性は著明であるが他のものはさうでない。然しこれ等 *Saccharomyces* あるひは *Cryptococcus* に屬する菌種も、その旺盛な糖分解能力あることより考へても、また臨床治療上ゲンチアナ紫液塗布の有効な點等より本症に對し病原的意義を有する場合もあり得ると思はれるが、特に妊娠あるひは糖尿病時にはその傾向が強い。

(受附：昭和 17 年 4 月 30 日)